

はじめに

西 成彦

戦後70年という節目の年に、日本にはふたたびきな臭い空気がたちこめてきているようです。しかし、これは今になっての話ではないと言うべきでしょう。今でも「平和」は「戦争」の反対語のように思われがちですが、「戦争のない状態」としての「平和」は、どうやって構築されるものなのでしょうか。「大東亜共栄圏」なる「新しい平和」の形を希求しながら、結局は軍事力に依存するしかなく、そうしたアジアの征服にあえなく失敗した日本は、今度はアメリカ主導の「平和」をいわば「享受」する国家として、70年間の繁栄を築いてきました。日本国憲法第9条は、そうした70年間の「平和」を「象徴」する条文です。しかし、はたして私たちはどのような「平和」を求めようとしているのでしょうか？

私はそういう問いを立てるときに、日本語ではあまり用いられない言葉ですが、「平定」pacificationという言葉が、これからはキーワードになっていくだろうと思っています。「平和」はなにものかによって「構築」され、ずっと「維持」されなければ、持続しません。そして、戦後70年間の日本の「平和」は「アメリカ」なるものの名の下に遂行される「平定」に「合意」することによってはじめて実現したのです。東アジア地域が今日きな臭い情勢になっているのも、まさに「平定」の力が、ここでは冷戦時代以上にはげしくせめぎあうようになってきているからです。

じつは三島由紀夫をはじめとする日本の戦後作家の多くは、このことにきわめて自覚的でした。進駐軍の姿を描こうが描くまいが、日本の戦後文学のなかには「アメリカ」が「大きな影」を落としていました。このことはみんなが理解していたはずなのです。にもかかわらず、2013年に刊行された南相旭さんの『三島由紀夫における「アメリカ」』（彩流社、2013）は衝撃でした。私も含め、日本人の多くは、たとえば三島由紀夫の世界観のなかで「アメリカ」がいかに大きな意味を負っているかにほとんど目を向けてこなかったのです。

《東京においては支配者としての「アメリカ」表象が忌避されていたのに対して、京都において〔中略〕「アメリカ」は「日本文化」の理解者として表象されていた》(p. 101)——こうした「京都型」の「占領イメージ」のなかに、『金閣寺』（1956）の三島由紀夫は、さまざまな欺瞞と虚構を読みとっていました。《無遠慮に〔中略〕僧衣の袖を引張つて、笑つたり〔中略〕あるひはいくばくの金を差し出し、記念写真をとらせるために、僧衣を貸してくれ、と言つたり》する米兵くらいなら、まだかわいいものですが、赤い外套を着た女を連れてあらわれた米兵に至っては、その彼女を突き倒し、主人公に向かって、英語で《「踏み。おまえ、踏んでみろ」》と命じるのです。後になってから分かることですが、「ジャック」という名の米兵は、妊娠した女の腹を鹿苑寺の小僧に蹴らせて、厄介者を葬り去ろうとしたのです。『金閣寺』が日本の戦後小説のひとつとして、忘れてはならないものであるとすれば、まさにその主人公が、米兵の命ずる

がままに踏んだ《春泥のやうに柔らかいもの》こそが、そこには描きとられているからなのです。そして、そのねじ曲がったエロスと、金閣寺の放火とは、どこかで通じ合っていたでしょう。

今回は、この南相旭さんの『三島由紀夫における「アメリカ」』を手掛かりにして、いま一度、米軍占領期から金閣寺消失（そして蜷川府政が始まる時期）までの京都をふり返っておこうと思います。

このような三島論が南さんという韓国の若手研究者の中から生まれてきたことに、私は偶然とは言えない何かを感じます。「日本」の植民地支配から「解放」されたばかりの朝鮮半島で、「日本」とはまた異なる形で「アメリカ」の蹂躪に耐えなければならなかったのが韓国で、その韓国にとってもまた避けて通れることはできない「アメリカ」という問題に、日本文学研究を介することでアプローチされたのが南さんだったということです。南さんが韓国において三島の『文化防衛論』の翻訳者として知られていることを知って、私はもう一度驚きました。日本人研究者がうっかりと読み飛ばしてしまうものを、韓国の日本研究者はまさにすくいにとって、私たちに「ホラッ」と示してくださるのです。南さんの仕事はそういう仕事だと私は思います。

グローバル化が進めば進むほど、今となっては世界のいかなる片隅においても避けて通ることなどできない「アメリカ」なるもの（＝「平定」を目標に掲げる力）から決して目を背けないという強い姿勢を保ちつつ、今日は、この京都の地で『金閣寺』を読み直すという有意義な時間を過ごせればと思う次第です。

大学への行き帰りにも、金閣寺を訪れる観光客の人波に目を奪われずに済まされないこのキャンパスで、それも立命館大学のシンボルのひとつでもある国際平和ミュージアムの一室で、本日、考えてみたいこと、それは三島由紀夫を起点にして「平和」（あるいはその困難さ）を考えるとはどういうことなのか。そういうことだと思っています。